

「愛の動機：祝福の御言葉」(2020.9.20)

「忠実な僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」(マタイ 25:21)

うっかり、大切なことを忘れていた。それは、「忠実な僕だ。よくやった。」という祝福である。主と結ばれているゆえにこそ、この愛の御言葉が絶えずシャワーのように注がれている、このことだ。牧師として教会から託されている務めを果たしているかどうか判断する自分自身や教会員の視線や評価に心が向いて、喜んだり気落ちしたりしている。あるいは、この世の出来事に感情が左右されている。それは心の底から主を第一としていない現れではないか、そのように気付かされたのである。

信仰者が死に臨んで最も聞きたい言葉は何であろうか。妻や夫、子供たち、あるいは友人や教会員からの慰労の言葉だろうか。いや、そうではない。上掲の主からの御言葉でないだろうか。実は今すでにその祝福の御言葉のシャワーは私たちの行いの良し悪しに如何にかかわらず、私たちの自己評価の如何にかかわらず、注がれているのである。神を愛し隣人を愛し、律法を完全に成就された主に結ばれているからである。

讚美歌 210 が響いてくる。「来る朝ごとに 朝日とともに、神の光を 心にうけて、みいつくしみを あらたにさとる。」心の中から疑いの傘を投げ捨て、顔を上げ、両手を広げ、降り注ぐ愛のシャワーに体ごと包まれない。顔や手に、体全体に降り注ぐみ言葉のシャワーにすべてを委ね、どっぷり濡れたい。神に愛されていることを確かにし、喜び楽しみ、力にしたい。そして、この愛に根差し、この愛に立って隣人を愛し、神を愛する者へと変えられたい。



パウロがエフェソの信徒のために祈った祈りが聞こえてくる。「また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。」(エフェソ 3:18-19)

神に愛されているその喜びを原動力にして愛に踏み出すのである。神に愛されたいから愛するのではない。逆である。愛の動機を常に自己点検していきたい。